

# 教養学部の学びと青年海外協力隊の 活動から得たもの

地域構想学科卒業生 佐藤京佳

大学時代から今日まで、私は多くの国や地域を訪れて様々な経験をしてきました。

大学入学前まで旅行にほとんど興味のなかった私が、知らない土地を訪れる楽しみを見つけたきっかけは、教養学部の講義や3年次からのゼミでの学習でした。

4年間の在学中に多くの講義を受講しましたが、最初に強く影響を受けたのは、2年次に受講した岩動先生の「地域の科学」でした。その講義では、日本の都市はもちろん、アフリカやアマゾンなど、外国の様々な地域にも焦点を当てた内容で、その土地の文化や魅力などの生活様式を学びました。この頃から、自分の知らない土地で全く違う生活を送る人たちがどのような言葉を話し、何を食べ、そして何を感じて生きているのか、国内だけではなく海外にも興味を持つようになりました。同じ頃、仙台国際観光協会が主催する「台南市青年訪問団」に参加して台湾を訪問し、翌年には日本国際協力センターが主催する「絆プロジェクト」にも参加してモンゴルを訪ねました。台湾では日本人が命がけでつくったと伝わるダムを見学し、日本と台湾の昔から続く国際交流について学び、モンゴルでは中心都市の急速な発展に驚きましたが、都市郊外の大草原には遊牧民の伝統的な住居「ゲル」が立ち並び、生活や文化の違いを実感する事ができました。しかし、これらの国から帰国したときいつも思い出すことは、外国で学校や市場を訪れたときに交わした現地の人たちとの何気ない会話でした。そして「もっと現地の人の声を聞きたい」と思い、教室での講義だけではなく外に出て実際に見たり、話を聞いたりするフィールドワークを通して地理学を学ぶことのできる岩動先生のゼミを選びました。

3年次のゼミでは東日本大震災後の復興調査として岩手県宮古市を訪れ、震災による商店街の被害と今後の経営を続ける上での課題や問題点について調査をしました。被災してまだ半年しか経過していない中、多くの方々が仮設住宅での生活を強いられていました。私の班は、津波の影響で店舗を失った経営者が田老地区の仮設商店街で商売をする「たろちゃんハウス」での聞き取りでした。事前に質問項目を準備していたものの、「町の人たちにどのように声をかけたらいいのか。」という迷いと「震災のことは話してもらえず回答を得られな

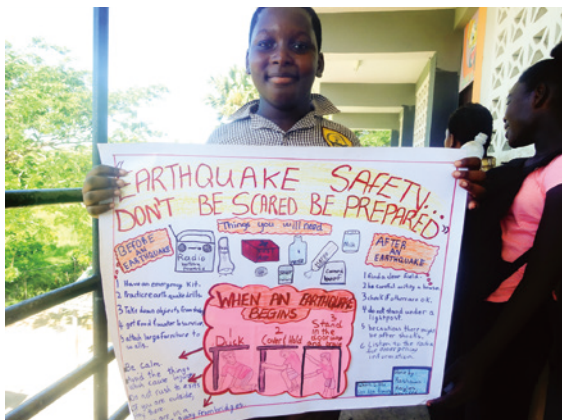


地形パズル



小学校での避難訓練

いのではないか。」という不安がありました。しかし仮設商店街の方々には、私たち学生のことを優しく迎えてくださり、震災当時の状況や各店舗の苦労などを嫌な顔をせずに丁寧にお話ししてくださいました。また困難な状況下であっても利益が出るように、どの店舗も工夫を凝らしていて、商売に対する誇りと強い思いを感じました。その後、調査結果のグラフや表、地図を作成し、聞き取り内容をまとめて報告書を発行したとき、一つのことをやり遂げた大きな達成感を得ることができました。この体験から、私は少しでも本音に近いことを聞き出すためには「現地へ行き、直接その土地の人たちにとって話を聞くのが最良の方法だ。」ということ学びました。復興調査だけでなく、岩動先生のご紹介で秋田県大仙市観光協会が主催する行事に参加し、酒蔵見学や郷土料理の創作体験もしました。夜には日本三大競技花火大会の一つである「大曲の花火」を主催する煙火業者が打ち上げる花火大会を鑑賞しま



ポスターコンクール

した。秋の澄んだ夜空に打ち上げられる色とりどりの花火は迫力満点で、「このイベントを主催する仕組みを知りたい。」と思い、4年次の卒業論文では同市内の煙火業者に聞き取り調査を行いました。

同じ学科の友人と「卒業旅行として今まで行ったことのない場所に行こう。」ということになり、外部講師の先生から勧めていただいたモルディブ共和国へ旅行しました。それまでこの国がどこにあるのかも知りませんでした。先生の言葉だけを信じて行ってみると、今までに見たことがないくらい綺麗なブルーの海と白い砂浜が広がっており、「世界にはこんなに美しい場所があるのか。」とたいへん感動しました。

このように大学生生活の中でたくさんの経験をする機会をいただきましたが、大学卒業後はさらに「知らない世界を見てみたい。」と思い、国際協力機構の青年海外協力隊に申し込み、防災・災害対策隊員としてジャマイカに大学を卒業した平成26年から28年の2年間渡航しました。不安を覚える中、現地での活動の内容は、小学生を対象にして防災教育や避難訓練を行ったり、災害時の避難場所を示したハザードマップを作ったりすることでした。文化も言葉も全く違うジャマイカ人に言いたいことを伝えるのはもちろん、地震を経験したことのない人々に言葉だけで、避難や防災のことを伝えるのはたいへん難しく、どのようにすれば伝わるのか毎日のように悩みました。活動は出発前に想像していたよりもはるかに大変で、防災教育をしたいと学校に申し出ても断られることが多く、逆に学校に何か買ってくれと言われていたり、現地の同僚とも意見が合わず、話を聞いてもらえなかったりと落ち込むことも多くありました。そのような時は1箱の値段が日本の4倍も5倍もする日本のカレールーを薄めて食べて元気を取り戻しましたが、それでも「自分がここに来た意味は何だろう。ジャマイカ人にとって私は何をするのがいいのだろうか。」と常に考えていました。悩んだ時には

大学生活を振り返り、足繁く通うことの重要性を思い出しました。そして何度も現地の学校へ出向いて熱意を伝えた結果、少しずつ防災教育を取り入れる学校が増えていきました。授業では、子どもたちを連れて災害が起きたことを想定して危険な場所を探しに行ってみたり、防災カルタをつくり授業で取り上げてみたりと、実際に身体を動かしながら学べるような授業を心掛けました。その結果、英語があまり得意ではない私でも言いたいことが伝わったようで、活動の締めくくりに最後に実施した防災ポスターコンクールで、子どもたちが一生懸命描いた防災の絵を持って参加してくれたときは本当に嬉しく、感動しました。うまくいかないこともありました。自分が伝えたいことが伝わったことにより、「ここに来て本当に良かった。」と納得して活動を終えることができました。

現在は社会人として日本の会社で働いていますが、どのような環境でも多様性を認めることのできる人間でありたいと常に思っております。このように成長できたのも教養学部での学びや卒業後にジャマイカで見た光景、出会った人々と様々な経験を通して、「常識とは人や地域によって異なり、それを許し合うことでお互いが気持ちよく生活できる。」ということを学ぶことができたからだと思います。今こうして振り返る時間を頂き、様々な経験をするチャンスを与えて下さった岩動先生をはじめとする教養学部の先生方の教えや、私の挑戦を常に見守ってくれていた両親に改めて、心から感謝しております。



#### 経歴

卒業年度：平成 26 年度教養学部地域構想学科卒業

ゼミ担当教授：岩動先生

卒業後：国際協力機構の青年海外協力隊に参加

現職：村本建設株式会社東京支店勤務